

2018年1月 キューバ医療事情

下記情報は当地報道を抄訳したものです。詳しくは原文をご参照下さい。

【キューバ医療事情】

1月2日【CIBERCUBA】

“2017年、キューバの19歳未満の小児癌の死亡率が低下”

保健省は2017年における19歳未満の小児癌の死亡率が14.2%低下し、死亡者数も減少したと発表した。69歳より若い患者において乳癌による死亡は4.45%低下し、頸部癌は2.38%減少した。大腸癌の死亡率も2.04%減少した。

皮膚癌や乳癌、頸部癌の早期癌の診断も改善した。

1月9日【CUBANET】

“キューバ東部の豪雨による被害”

寒冷前線の停滞による豪雨によりバラコア市とマイシ市は被害を受けた。先週1月7日の日曜日からは始まった豪雨により、家屋2件の倒壊やギュイン島やキビハン、ニボホン地区が月曜日の午後まで孤立した。豪雨による地滑りや河川の氾濫、道路の寸断により連絡が取れない地域が残っている。

1月7日午前10時から翌日10時までの降水量がバラコア市では51.7mm、エル・ハマルでは123mmに達した。農作物への被害は、1年以上前のハリケーン・マシューで甚大な被害を受けたココア苗床が特に被害を受けた。また泥水の流入により送水路や河川からの給水サービスは停止した。いくつかの地域では電柱の倒壊により停電となり、排水溝が詰まった地域も報告されている。

バラコアのような低地に位置する町では山からの鉄砲水の危険にさらされており、下水道が清掃されない間は、通りに下水があふれ出す危険性がある。

マイシ市ではバラコア市との道路が土砂崩れ等により数カ所寸断され、車の往来が妨げられている。そのためマイシ市はバラコア市からの緊急医療援助を受けられなくなっている。

1月10日【CUBANET】

“キューバとホンジュラスの間に大きな地震が発生”

カリブ海北西部、キューバとホンジュラスの間で9日、マグニチュード7.8の地震があった。米国地質調査所によると、地震はGMT（グリニッジ標準時）10日3時頃に起きた。震源の深さはおよそ10キロ。震源地はホンジュラスのスワン諸島から東44km。カリブ海沿岸には津波の危険性があるため緑色警報が発せられた。

1月17日【CIBERCUBA】

“キューバ、癌に対する新しいワクチンの治験”

エベルフェロンは非黒色腫皮膚癌に適応があり、キューバの52の病院で使用されている。昨年このワクチンは450人の患者に対して投与され、鼻や耳、瞼といった場所におけるこの癌を切除なしでの治癒を達成している。

ビオクバファルマの研究班はこの皮膚癌と同様にその他の癌に対してエベルフェロンの適応があるか検証するための新しい研究を行っている。脳腫瘍では第1相臨床試験、腎癌では第2相臨床試験が行われている。また子宮頸癌や固形腫瘍に対する治療的ワクチンの製造にも取り組んでいる。

カマグエイにある遺伝子工学とバイオテクノロジーセンターでは前立腺癌に対するワクチンを開発している。

1月18日【CUBADEBATE】

“キューバで新生児の嚢胞性線維症を診断するための予備研究を開始”

今月よりキューバの5つの県（ハバナ、マヤベケ、アルテミサ、マタンサスとサンクティ・スピリトゥス）で遺伝性疾患である嚢胞性線維症を生後1週間で診断するための予備研究が開始された。キューバの免疫学的測定センターで開発された診断法の有効性を実証するため研究は3ヶ月間行われる。

海外では出生時に検査をすることは可能であるが、高価な試薬が必要なためキューバでは試薬を入手することができなかった。

今回の予備研究の前に外国製と国産の試薬の比較試験が行われており、今回の予備研究で新生児のスクリーニングにおける効果が裏付けられるであろう。

キューバには約290人の嚢胞性線維症の患者がおり、60%は小児で診断され、40%が19歳以上で診断されている。

1月21日【CIBERCUBA】

“カリスト・ガルシア総合大学病院創立122周年”

キューバ医学の主要な医療機関であるカリスト・ガルシア病院は創立122周年を記念して2018カリスト・ガルシア国際会議を開催する。この会議には1500人以上の参加者が見込まれている。カナダ、米国、メキシコ、エクアドル、ペルー、コロンビア、ドイツだけでなくベネズエラ、東チモール、ベリーズ、ドミニカ共和国、コスタ・リカ、エル・サルバドル、ガイアナ、ホンジュラス、中国、ハイチから教授達が訪れ、外傷手術や頭頸部手術、一般外科手術や脊椎手術、四肢の手術や重症患者の治療、慢性疾患、代謝疾患、感染症等多岐にわたって議論される。会議はカリスト・ガルシア病院敷地内で行われ、1月22日から24日にかけて600以上の演題の発表がなされる。

1月24日【Granma】

“新たなキューバ製ワクチンが来年出荷”

肺炎球菌は乳児の肺炎や髄膜炎の主な原因菌である。この病気に対するワクチンは世界中で流通しているが、キューバでは高価格のためそれらを利用できなかった。

フィンレイ研究所で開発された7価肺炎球菌ワクチンはクイミ・ビオと商標登録され、来年から国中で利用可能となる。

臨床前試験の後、シエンフエゴス県で1歳～5歳の小児5000人以上を対象にワクチンの効果と安全性を確認するための臨床試験が行われた。またハバナにあるファン・マニュエル・マルケス小児病院では生後2ヶ月～3ヶ月の母乳で育てられている乳児も対象に組み込まれた。治験の結果はハバナで1月23日から始まる第28回小児科学会で発表される。

1月28日【CIBERCUBA】

“オルギン県の医療センターでは体外受精による出産が20例に達した”

オルギン県にあるレーニン大学病院の医療センターでは、2014年7月12日より体外受精が開始され、2年前に最初の体外受精による子供が生まれている。

ここでは数多くの精子造影、授精、腹腔鏡手術、内視鏡手術、腹部手術が行われており、109人が妊娠し、そのうち95人が出産した。双子も1組生まれた。このセンターで昨年何らかの処置を受けたカップルは237組に達し、2016年より36組増加した。体外受精により45人が臨床的妊娠、17人が生化学的妊娠を認めた。体外受精により23人の子供が生まれている。

20人の専門医がいるこの医療センターの対象地域は東部5県とカマグエイ県である。このセンターができる前は、東部地域の患者はこれらの治療を受けるためにハバナに行かなくてはならなかった。

1月29日【CUBERCUBA】

“キューバはマレーシアでワクチン製造を希望”

キューバは医療分野での先進性を認められており、マレーシアでのキューバのワクチンの製産が可能かマレーシアに調査を提案している。

在マレーシア・キューバ大使は“マレーシアにはキューバのワクチンを製造するための大規模な設備があり、両国間での医療分野における貿易自由化の可能性を探っている”と述べた。2月6日でマレーシアとキューバの外交樹立43周年となる。

1月30日【Marti】

“石油のための医師：キューバはアルジェリアとの新たな貿易協定を公表”

キューバはベネズエラの危機によりベネズエラからの原油の補助が減少したため、その代わりになるものを探していた。

今週火曜日にキューバ政府とアルジェリア政府は、経済協力の協定に調印した。

キューバはアルジェリアに対して医療サービスの輸出拡大を行う。アルジェリアの石油会社であるソナトラックとキューバ石油連合（クペット）は、商業的な契約を取り交わした。キューバの国営企業は石油製品とその誘導体の抽出、製産、精製、輸送に特化することになる。アルジェリアのメディアは2017年に入った数週間で、キューバに210万バレルの原油が送られたと報じた。これによりキューバは新たな国から石油供給を受けることができるようになった。